

『稿本天理教教祖伝』の111～112頁には、

「教祖は、かねて、かぐら面の制作を里方の兄前川杏助に依頼して居られた。杏助は生付き器用な人であったので、先ず粘土で型を作り、和紙を何枚も張り重ね、出来上りを待って粘土を取り出し、それを京都の塗師へ持って行って、漆をかけさせて完成した。月日の理を現すものは、見事な一閑張の獅子面であった。こうして、お面が出来上って前川家に保管されて居た。一中略一親神の思召のまにへ、時句の到来を待って、明治七年六月十八日(陰暦五月五日)、教祖は、秀司、飯降、仲田、辻等の人々を供として、前川家へ迎えに行かれた。」と記されています。

そして、その時のお礼として、前川家に渡されたのが、「おふでさき」の第3号と第4号で、その表紙に、「前川家に長々と御預り有り」と、長らくお面が預けられていた旨が記されているのですが、それがどれ位の期間であったのか確かなことは分かりません。

しかし、教祖の兄の杏助氏は、明治5年9月4日に80歳で出直されていますから、お面が出来上がったのは、教祖がお迎えに出向かれた時より、少なくとも2年以上は前のこととなります。当時の80歳といえば、現在の感覚よりはるかに高齢でありますし、大きなお面や背負い物を10数個も京都の塗師に持っていくことを考えれば、お面制作は杏助氏出直しの年の明治5年よりはもう少し前だったと考えるのが妥当であります。

しかるに、一方、明治5年より8年前の元治元年に大和神社事件があった時には、その神社の氏子総代で中山家としては一番頼りにしたかった前川家(当時杏助氏72歳)が、何らかの理由で全く力になっておられない様子が、明治24年の「おさしづ」などから窺われます。ですから、元治元年以前には、前川家にお面の制作の依頼をされてはいないと思われるのです。

他方、前川家では、元治元年の翌年の慶応元年に、杏助氏の子供の半七氏と、杏助氏の末弟で杏助氏の準養子になっていた半兵衛氏の娘のしづさん(血縁的には従妹どうし)が、教祖の御指図で結婚されています。(杏助氏に子供がなかなかできなかったため、末弟の半兵衛氏を養子にされたが、その後実子の半七氏が生まれた一実子と養子になった末弟の娘の結婚という複雑な関係の婚姻は、教祖の口添えがなければ成立しえなかったと思われる。)そして、翌慶応2年に、半七・しづ夫婦の長男一杏助氏の嫡孫の菊太郎氏(前川家資料では菊治郎一中山善兵衛様の生まれ更わりといわれる)が出生しています。

つまり、元治元年ころには途絶えていた中山、前川両家の関係が、慶応に入ってから徐々に復活したと推察されますから、そこから、先ず、最初のかぐら面の制作時期は、慶応元年から明治4年の6年間くらいに絞られるのであります。

さらには、教祖は明治2年に「おふでさき」第1号と第2号を執筆され、明治7年に第3号から第6号の半ばまでを書かれています。そして、その第1号には、中山秀司様と小東まつゑ様の結婚のことが記されていて、実際にその年にお二人が結婚されています。そして、前川家に贈呈された「おふでさき」(第

3号1～47と第4号1～20)の中の第4号3のお歌に、陰暦5月5日にかぐら面を迎えに行くことが記されています。ですから、「おふでさき」第1号執筆以前にかぐら面の制作を始めたと考えるよりも、第1号と第2号ご執筆以後、すなわち明治3年以後に、かぐら面制作を前川杏助氏に依頼されたと考えするのが自然でありましょう。つまり、かぐら面は明治3～4年に杏助氏に依頼して作製されたと推察されるのです。

しかるに、それではなぜかぐら面のお迎えが、作者の前川杏助氏が出直された2年も後になったのでしょうか。これも資料がないので確たる理由は分からないのですが、同じ時期の出来事からの推測は次のとおりです。

教祖は、前川家にかぐら面のお迎えに出向かれた4カ月後の明治7年陰暦10月に、仲田、松尾の両名を大和神社に派遣して、神祇問答をしかけられています。そして、その時に二人の使者が持っていかれたのが、前川家に贈られたのと同じ第3号と第4号の「おふでさき」でした。

二代真柱様は「おふでさき」第4号の解説をされた中に、「本号に於いては、たすけづとめを巡って、3つの立場が窺われる」と述べられ、その一つは、「親神の思召を述べて、世界だすけの上からつとめの理を説かれる教祖の立場」、その2は、「『うちなるもの』として『つとめ人衆』になるべく因縁の上から引き寄せられながら、上に気兼ねして神にもたれきれないでいる人たち」、その3は、「『上』『高山』又は『学問』という言葉で呼ばれる『為政者』『支配者』、見えたことしか言わない『常識人』」であると述べられています(この分析は第3号にも当てはまるところがあると思います)。

つまり、“人間のこれまでの常識を打ち破って、親神のたすけの道を推し進めよ”というのが、この「おふでさき」3号と4号のテーマでありますから、「うちなるもの」と「上」の双方の立場の代表に、この同じ二つの号の「おふでさき」を渡されたと推察できるのです。

ただ、そこで違うのは、前川家の方には、“かぐら面の制作と保管”という役割を与えて、つまり、“親神の守護の姿の形を目に見せて”後に「おふでさき」を渡されているのに対して、大和神社の方には、“神様の守護についての問答をしかけられた”後に「おふでさき」を渡されているということであります。

さらに申せば、明治5年に出直された杏助氏の葬儀は、(廃仏毀釈の嵐が吹きまくっていた時期ですから)大和神社の神職が神式で執行したと推察されます。それで、神社の関係者が前川家に入りましたこともあったかと思われそうですが、その時のかぐら面の保管状況はどうだったのか? 蔵の中に納められていたとしても、10個もの大きな面が葬儀の準備をする人達の目に止まる可能性はあったと思うのですが、そのかさばるお面を葬儀の前には引き取られなかったのです。というより、葬儀の後2年間もそのまましておかれ、大和神社に神祇問答を仕掛けに行かれる5カ月ほど前になってようやくお引き取りになった。つまり、「上」との対峙を始められる前に、「うちなるもの」におつとめ完成への覚悟を促すための時間を十分に与えられた、ということではないかと思うのであります。